

# 剣道の文化誌



# 第1章 剣道のはじまり——「剣」と「刀」をめぐる——

武道の一つである「剣道」。一般の方にとって、剣道具を着け竹刀<sup>しなひ</sup>で打ち合う姿を漠然とイメージすることはできても、例えば剣道の「一本」ほど、わかりにくいものはないであろう。本書では、中世の剣術に源を持ち、しないや剣道具の創案によって撃剣<sup>げっけん</sup>という修練の様式を育み、それを剣道という文化として発展させてきた経緯について、おもに技術史・用具史的観点から見ていこうとするものである。本章では「剣道のはじまり」について考えてみたい。

## はじめに

日本武道の一つである「剣道」について、読者の方々はどういうイメージをお持ちであろうか。剣道という言葉を聞けば、剣道具（防具）を着けて竹刀で打ち合う姿を日本人の多くはイメージすることができようが、いざそれを海外の人にどういうものであるかを説明するとなると、オリンピック種目である柔道ほど容易ではないであろうし、また、それが剣道の特徴といってもよいであろう。

よく一般の方々からお聞きするのは、剣道着・袴を着けた姿などに「凜りんとした」ものを感じる、という肯定的な見方がある一方で、「剣道の試合をテレビで何回見ても、あの『一本』というのが速すぎてどうしてもわからない」という言葉を多く頂戴するのも事実である。実はここに挙げた二つの側面は、どちらも剣道の歴史の中で長い年月をかけて作り上げられてきたものである。本書では、こうした特徴を持つ剣道の文化としての成り立ちについて、なるべくわかりやすい形でお伝えしていきたいと考えている。

さて、「文化」という場合、社会学・人類学はじめ多くの学術的定義があるが、ここでは紙幅

の都合もあり、そこには深く立ち入らない。多くの辞書等の定義に共通する「一定の集団・社会において長い年月をかけて共有・継承・発展させてきた行動・様式や、それに付随する有形無形の成果」と大まかに「文化」を捉えて稿を進めていく。

なお、筆者は大学院在学時代から一貫して剣道の技術・用具史を中心に研究を進めてきた。「文化誌」という大きなタイトルではあるが、本書における記述もそうした技術・用具史が中心となることをお断りしておきたい。では、「剣道という文化」は、どのようにしてでき上がったのであろうか。

### 「剣道」のはじまりはいつか

剣道のはじまりはいつであらうか。全日本剣道連盟が平成15（2003）年に『剣道の歴史』を刊行した際、編集企画部会員および執筆者の一員として関わらせていただいたが、その折に「剣道のはじまりをどこに置くか」ということが議論された。

剣道の技術や用具、修錬や試合の形態・様式、およびそこに含まれる精神性や思想をどこまで遡ることができるか。結論的には同書「総論編」のはじめに記されているように、「（前略）

剣道の淵源をさらに細かくたどると、刀剣にまつわる祭祀上の概念は古代に、鑄<sup>しのぎ</sup>づくりの打<sup>うち</sup>刀<sup>かたな</sup>に代表される日本刀の技術は中世に、伝書や形<sup>かた</sup>による教習体系の整備は近世前期に、竹刀と剣道具を使用した技法の改革は近世中期以降に、それぞれ遡<sup>さかのぼ</sup>ることができる」(1)という共通認識を持ちつつ編集・執筆作業が進められた。ここにあるように、「刀剣にまつわる祭祀上の概念」は古代に遡<sup>さかのぼ</sup>ることができるが、(後述するように)実はこれが「剣道」という呼称と深く関わっている。

一方で剣道は、その基本的技法(剣術の源流)が形作られた中世においては、戦闘経験から得た太刀<sup>たち</sup>(日本刀)の合理的操法を基底としたものであったし、それは現代の剣道においても部分的・精神的に受け継がれている。今、我々が使う四つ割り竹刀は、「片刃」の日本刀を前提とした造りになっていて、弦<sup>つる</sup>を棟<sup>むね</sup>(峰<sup>みね</sup>)に見立て、弦の反対側の竹片を刃と規定することによって試合・審判規則が構成され、そのことを自明の理として日々の稽古も行われている。

また、一本(有効打突<sup>だとう</sup>)となるためには、竹刀の打突部(物打<sup>ものうち</sup>を中心とした刃部<sup>じんぶ</sup>)で、相手の打突部位(面部、小手部、胴部、突部)を刃筋<sup>はすじ</sup>正しく打突しなければならぬ(試合・審判規則第十二条)。「物打」とは、「刀身の中で、最も良く切れる部位のことで、切っ先より10cmほどのところのこと」といわれている。竹刀の場合には最も力が有効に作用する刃部のことで、



中結あたりから剣先にかけてのところ」とされている(2)。

このほかに、日本刀独自の「鑄」しのぎの部分を生かした技法が、(刃引や木刀を使用して行われる)「日本剣道形」や「木刀による剣道基本技稽古法」の指導において尊重されている。さらには、刀や木刀と違い構造的に明確には鑄という部分を持たない竹刀を使用する日々の稽古においても、特に相手の竹刀の勢いを削ぐ、あるいは方向を変える目的で使われる払い・すり上げ・返しなどの技術において、鑄に相当する部分を意識して行うことが尊ばれ、実際にそういう意識でそれらの技術を行うと、合理的かつ経済的な太刀筋となり、うまくできる場合が多い。このように見てくると、剣道よりも「刀道」と呼ぶ方がふさわしいようにも思えてくるが、剣道の歴史においてはあえて「剣」の字を尊重してきた流れがある。

### 「剣」と「刀」をめぐって

考古学では両刃のものを「剣」、片刃のものを「刀」としている。一般的にも(平家伝来の小烏丸こがらす丸のように例外的なものの中にはあるが)おおよそそのように解釈して良いであろう。前項で見たように、剣道は技術的には「刀」の流れを色濃く汲むものであり、その点から言えば

「刀道」であつてもおかしくはないのであるが、剣道発展史（剣術→撃剣→剣道）においては、あえて「剣」の字が多用され、前面に出されてきた<sup>(3)</sup>。

酒井利信氏は、柳生新陰流『兵法家伝書』の「人をころす刀、却而人をいかすつるぎ也」について、「万人を苦しめる一人の悪人を殺す刀は、万人を活かす剣になるといった『活人剣』思想に基づくものである。剣と刀、明らかに観念上の区別があり、特に剣を神聖視する見方がある。こういった観念は、剣術に広く浸透していた」としている。また、氏はそうした「剣の観念」のルーツが我が国の神話にある草薙剣くさなぎのつるぎや劔つるぎ、および東アジア地域に見られる宝剣伝説に由来し、剣（術）というものが辟邪へきじや（邪悪を排除する）の要素を持ちつつも、殺人技術ではなく「人を活かすつるぎ」の道となり、人間形成の道に成り得ると指摘している<sup>(4)</sup>。

全日本剣道連盟では、昭和50（1975）年に「剣道の理念」を制定した。その理念は、「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である」とされ、戦後の剣道が極端に競技偏重となり、「刀の観念」や人間形成的側面が軽視されていることへの危機感から策定されたものであつた。その議論の過程では「刀」という言葉を入れるべきという強い意見があつたが、結果的には「刀の理法」ではなく「剣の理法」とされた<sup>(5)</sup>。

その後、平成19（2007）年に全日本剣道連盟は「剣道指導の心構え」を制定したが、そ